

日本労働年鑑 第27集 1955年版
The Labour Year Book of Japan 1955

第一部 労働者状態

第五編 労働者の生活

第二章 栄養

第二節 農民の栄養状態

農民の栄養状態に関する全国的調査は、農林省「農家経済調査」の一環として一九五一年四月より実施され、その結果は毎月「農林省農民栄養調査」として農林水産統計月報に公表されている。本年鑑はこれまでその調査結果の概要を紹介してきたが、ここでは農林省統計調査部が一九五一—五二年における栄養調査につきとりまとめ公刊した詳細な報告「農林水産統計資料第二六号農民栄養調査報告」(一九五三年九月刊)にもとづき、同年度における農民の栄養状態を記述することにする。

調査対象の農家は、農家経済調査の対象と同一で、全国各農区より階層別に任意抽出された四三五〇戸である。また調査品目は八四種の飲食物であり、また栄養摂取量は食品別の戸当り消費量から「栄養成分法によって摂取栄養量を計算し、これを戸当り世帯員数で除して一人当りの摂取量を算出したものである。さらに成人一人一日当り栄養摂取量は成人換算率を用いて右の結果から算出されたものである。その他、調査上の約束や栄養分析の基礎として用いられた諸資料については、前掲報告書または本年鑑第二六集一六七頁を参照されたい。

農区別階層別にみた摂取栄養量

調査農家の一九五一年四月一日現在における全国平均戸当り世帯員数は六・五三人(男三・一八人、女三・三一人)である。第230表は一九五一年四月から五二年三月までの一カ年における農区別にみた農民一人一日当りの栄養摂取量を示している。熱量は二四〇三カロリー、蛋白質は六四・九九グラム、脂肪は一三・七〇グラムであるが、その摂取熱量の大部分は穀類からとったもので(全体の八一・六三%)、また総蛋白質の中で動物性蛋白質のしめる割合は一一・七四%にすぎない。農区別にみると、熱量では東北が最大で南海が最少であるが、脂肪では北関東が最高、北陸がもっとも低い。動物性蛋白質の比率からみると近畿がもっとも大きく、北陸がその対極をなしている。しかしこの調査結果から直ちに東北、北関東、近畿などの農民の栄養状態がすぐれているという結論をかんたんに下すことはできない。なぜなら、農区により、自然条件、労働時間、労働強度、生活環境などさまざまに異っており、従って栄養摂取の必要量もまちまちだからである。

そこでつぎに農業構造の上からみて対照的な北陸と近畿における農家の経営耕地面積の階層別に栄養摂取量を比較してみると第231表の通りである。北陸、近畿の両農区ともに、農家の経営階層が大きくなるほど蛋白質、脂肪、熱量の摂取量が増大しており、五反未満の下層農家と二町以下の上層農家では相当のひらきが生じていることは注目されてよい。たとえば近畿地区では、熱量において、二町以上農家は、五反未満農家層にくらべ一人一日当り五三三カロリーも多く摂取してお

り、農区別の差より、農家の階層別の差が大きいことがわかる。

食品群別にみた摂取熱量及び蛋白質

第232表は各農区における食品群別にみた農民の摂取熱量を示している。農民の摂取熱量の大部分が穀類からとられていることは本表によって明白であるが、とくに東北、北陸、瀬戸内地区がいずれも穀類から二〇〇〇カロリー以上をとり、相対的に穀類に依存することが多く、この点では北海道、東海、南関東地区と対照をなしている。農民の食生活の向上の程度を示す一指標とみられる肉卵乳類では、北海道が最も多く、山陰や東北がもっとも少い。油脂類では北陸地方がもっとも少い。その他の食品を比較して見ても、そこに一定の明確な特徴を見出すことは困難であるが、これを農家の階層別に比較してみると、かなり著しい傾向がみとめられる。第233表は北陸、近畿における階層別摂取熱量を示したものであるが、近畿、北陸地区ともに摂取熱量は階層の大きな農家ほど多く、下層ほど少いことは前述の通りである。これを食品群別にみると、たとえば北陸では、二町歩以上層は穀類による摂取が最大で、五反歩以下は最小である。豆や野菜は同様に上層にゆくにしたがって摂取量が多く、これに反し海藻や乾物は五反未満層が多い。肉や卵等はむしろ中農層が多く五反未満と二町以上の両端が少量である。しかし嗜好品になると上層に従って多く、ことに二町以上層になると下層に比べ著しく多いのは、それぞれの階層における生活水準を反映するものであろう。同様の傾向は近畿地区についても見ることができる。

一般に栄養摂取量は蛋白質の必要摂取量を充す程度にこれを摂取しなければならぬといわれている。したがって、蛋白質の含有量の少い食品をとるばあいは、その食品量そのものを多量に摂取せねばならない。

農民はいかなる程度にこれをとっているか。第234表は農区別階層別に蛋白質の総摂取量を比較したものである。まず農区別にみると東北七〇・六六グラムで最も多く、南海五七・二三グラムで最少である。この両農区の差は二〇%である。経営耕地面積の階層で見ると、北陸地方では最低は五反未満層の五八・三六グラム、最高は二町以上層の六七・三九グラムで、一三・四%のひらきがある。近畿地区では五反～一町層が最低で、最高はやはり二町以上層で両者のひらきは一三・三%に達している。

穀類と砂糖の消費量

最後に、農民の穀類、砂糖等の消費量を見よう。米の消費量のもっとも多いのは北陸の三・九八合で、東北三・九三合、山陰三・四〇合などがこれにつぎ北関東二・八五合、南海二・六四合、北海道二・六二合の順となっている。麦は北九州一・〇二合で最高、東北は〇・二六合、北陸〇・〇七合ときわめて少量である。パンはほとんど計量できないほど少く、農村でのパン食は現在までのところ問題にならないことがわかる。きび、あわ等の雑穀消費量は北海道〇・四三合がもっとも多く、その他の地区では東北、南関東が比較的多い。階層別にみると、北陸では上層農家ほど米の消費量が多く、麦の消費量が少いという傾向を示し、近畿でも米は上層農家ほど消費量が多くなっている(第235表参照)。北陸地区で上層農家に米の消費量が多いのは、保有米に余裕があるためであろうが下層になると保有米を割り五反以下層では三・五合(近畿の五反以下層では二・九九合)しか消費していない点は注意されねばならぬ。もっともこの階層には世帯員中に工業労働者その他の兼業従事者が相対的に多くふくまれていることも考慮されねばならぬ。

砂糖消費量は農民の消費生活水準をしめす一指標たりうるであろうが、農区別にみても、階層別にみても、それほど差はみとめられない。札幌における一人一カ年の消費量は一・二七七匁で最

高をしめし、北九州、東海、南関東等が比較的多く、北陸、山陰、東北の消費量は少い(東北は最低で七四九匁)。やはり、これら東北、北陸、山陰地方の農民の生活水準は相対的に低いことを示すものであろう。

日本労働年鑑 第27集 1955年版

発行 1954年11月5日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2001年10月16日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1955年版(第27集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
